

## 安住

「安住」の二文字は、昨年六月、『大乘起信論』の講座の時、明覚、武井諦了君にさしあげた聖語であったが、不思議にも私自身の上に頂いた文字となった。それから安住の二文字が、水の底に沈む石のように、私の心の底に念仏と共に沈んでゆく。その行方ゆくえをつきとめようとしても果てしがない。でもありがたいことである。

慧遠は、安住の二文字を解釈して「成徳円備。徳成無退。故曰安住。」と言った。成徳円備、たしかに「徳を成すこと円備」でなければ、安住の二文字はあり得ない。であるから、生死海に流転する凡夫に、随縁の雑善しかない凡夫には、安住はあり得ない。しかるにかかる凡夫にも、功徳の円備せる南無阿弥陀仏が廻向せられることによつて、安住の二文字が顕現するのである。与えられるのである。

しかるに、徳は決して固定せられたものでなく、死んだものでないが故に、「徳成無退」とて、徳が退くこと無きを成就するのである。徳が不退転を成就するのである。まことに徳は、生きて生きて生きぬぎ、はたらいてはたらいてはたらきぬくのである。名号六字は、真実功徳であるが故に、永遠に生きて、衆生の上に不退転の菩薩行を成就したものである。かくて「徳無退を成ず」るのでなければ安住はない。されば、成徳円備、徳成無退ということは、南無阿弥陀仏の上のみあり得ることである。したがって、真実の安住は他力本願の大信心の上のみあるのである。

蓮如上人は

「普流の安心おもむきの趣を詳しく知らんと思はん人は、あながちに智慧才学もいらす、ただわが身は罪深きあさましき者なりと思いとりて、かかる機までも助けたまへる仏は阿弥陀如来ばかりなりと知りて……………」と仰せられた。

この「当流の安心」の言葉は、蓮如様によつて幾度もくり返された言葉であるが、まことに深い趣きのあるみ言である。

大善は、それが人に顕現する時、必ず、まず「安心」をもたらず。不安心の所に大善大功徳なく、大善顕現あらわれるところ、必ず不動の大安心がある。重ねて言う、大善は必ずそれが人に生きると共に大安心を廻向する。他力本願の「信樂」の文字がそれである。

「当流の安心の趣を詳しく知らんと思はん人は、あながちに智慧才学もいらす。」  
生きること徹頭徹尾安心がないならば、真実に道というものは成就しない。真に生きるということは成立しない。安らかであることは、道を生きさせて頂くことの基調である。

しかるに、その安心の世界にはあながちに智慧才学がいるのではない。否、時には、凡夫の小賢しい智慧や、愚かな才学があるために、かえって悪事をはたらき、小才にあやまられて、悪業を深めて不安心を増すであろう。悪に不安はつきものである。されば、安心を獲るのには智慧才学がいるのではない。正しい他力の信心が必要なのである。

正しい信心の世界においては、如来の光明が内に光って下さって、内へ内へと内観の世界に帰らしめられて、そこに「わが身は罪深きあさましき者なり。」との機の深信を成就し、そのまま「かかる機までも助けたまえる仏は阿弥陀如来ばかりなり。」との深信の世界に入るのである。

されば、如来を信じ、内へ内へ、内観深信の世界が開け、我が心の真相にふれてゆくことは、不安より安心の世界へと帰ってゆくことである。

人は多く、自己の真実の相に触れまいとし、それに触れられることを拒もうとする。それは、悪なる我を知ることを好まぬが故である。我の立場がなくなるが故である。しかしそれは不安を増すだけである。我に立場を与えれば与えるだけ不安が増して来るであろう。

もし、他力の大信心、真実の大善大功德なくして安心を得ると言うならば、彼は悪に強くなる人である。悪を重ねてしかもなお安心ならば、彼はすでに悪党と言うべきである。かかる人はついに地上にはあり得ない。いかなる犯罪人も必ず、警察を恐れ、人目をしのび、遠く逃避し、姿をくらますは、悪は不安心なるが故である。

悪人は不安である。されど善人もまたそのままでは不安である。  
真実の安心は必ず真実宗教においてのみ可能である。

「安住」の二文字について考えつつ、昭和十一年を送り、十二年を迎えた。細々と安住そのものの中に、今日まで生きさせて頂いたことは、ありがたくもまた嬉しいことである。

本年の始め、本部の佐々木温三君がその日誌の初めに、揮毫を求めたので、「帰依大安慰」と書かしてもらった。

和讃に云く

「慈光はるかにかふらしめ　ひかりのいたるところには

法喜をうとぞのべたもう　大安慰を帰命せよ。」

この和讃は「歡喜光」の世界を現わされたものである。仏を歡喜光と言うのである。この仏の光、即ち慈光のいたるところには、「法喜」を得るのである。法喜とは、信心歡喜のことである。されば法喜とは歡喜光の相である。聖人御草稿の左訓に「くわんぎくわうぶちを、ほふきという。」と示したもうは、衆生の法喜が歡喜光さながらのものたることを現わしたもうたのである。

無量寿仏を「大安慰」と言うは「生死の中に於て大安慰を作す」（大方等日藏経）が故である。仏は、生死海中の苦患の衆生、恐怖のみの衆生に、大安慰を与えたものである。大安慰とは、安穩ならしめ、慰め、癒したもうことである。安住はただこの仏のうちにのみある。されば、この大安慰に帰依して生きる者にのみ、安住、安穩はあるのである。南無阿弥陀仏の異名を大安慰と言うことは、ありがたくも意味深いことである。

如来に帰命して生かされることは大安慰に帰依することである。安住そのものが、無安の生死海に訪れたもうことである。

和讃に云く

「大願海のうちには 煩惱のなみこそなかりけれ

弘誓のふねにのりぬれば 大悲の風にまかせたり。」

本願のうちには波はない。大安慰そのものである。内に内にと念仏に乗托して、内観の一道をたどる時、水火二河を凝視しつつも、煩惱の波なき大願海のうちに摂取され、大悲の風にまかせて生きる世界を見出すのである。

赤手空拳、自ら描いた理想を追うて努力して生きる、という思想や生活がある。いわゆる自己実現の生活である。しかしはたしてこの道が末通る大道であろうか。

法界にもまた悠久なる大理想は円成せられてある。智慧光であり、歡喜光であり、清浄光がある。永遠の太陽は我等の彼岸に輝いているのである。我等が生きるということは、その大理想直下の事実である。一切が太陽の光に生育するように。

仏教の道は自己実現の道ではなかった。曇鸞大師は「顕現」の文字を使われ、親鸞聖人は「廻向」の世界を開かれた。道は、大理想たる彼岸のすべてが、衆生の上に廻向して下さるのであり、顕現して下さるのである。

この廻向の力、顕現の力を、本願力と言うのである。この本願力より外に理想の浄土に生きて往くことも、浄土における菩薩の活動もないが故に、曇鸞大師は、

「凡そ彼の浄土に生ると（往相）及び彼の（浄土の）菩薩人天の所起の諸行（還相）とは、皆阿弥陀如来の本願力に縁るが故に。」

と説かれた。一切は如来本願力の廻向顕現によることを示されたのである。

人生は、生死動乱に満ちた不安そのものの世界ではある。しかるに、安穩そのものをその実相とする浄土は、本願力によつて、名号のうちに真実の安住を廻向して下さるのである。まことにお念仏のうちにのみ、ほのかに安住のみ座を頂くことはありがたいことである。

私はみ教を頂きつつ、念仏して、今からも、そしていつまでも、安住の二文字を凝視して生きることであろう。